

シンボルツリー

齊藤 真紀 大阪府箕面市 四十三歳

「なんでその服買ったの」

「安かったから」

「母ちゃんってどうしていつも同じ髪型なの」

「手入れが楽なんでもん」

「父ちゃんのどこが好きで結婚したの」

「丈夫なところかな」

「ふーん」

娘の問いに即答して我ながら何だか味気無いと思う。

新居のシンボルツリーを決める時、植木屋は言った。

「皆さんおっしゃるんですよ。丈夫でお手入れが楽でお値段がお手頃って」

私達夫婦は植木屋お勧めのカタログをさっと見て、どれでもいいよねと笑った。落葉しない方が掃除が楽ですよねと夫が確認している。その時、不意にどこからか甘い匂いが漂って来た気がして私は驚いた。それはふかふかの落ち葉から立ちのぼるカラメルに似たこうばしい香りだった。

私が幼少期を過ごした町には大きな桂の木があった。見上げてもてっぺんが見えないくらいの天を突くような大木だった。学校帰りに親友と長い長い雨宿りをした木陰。交換日記に挟んだハート型の押し葉。そして落葉の季節立ち込めるあの甘い香りの中で約束した、ずっと友達でいよう。

「桂の木を植えたいな」

私が唐突に言ったので植木屋は慌てて別のカタログを操り始めた。

「うちのシンボルツリー、なんで桂にしたの」

娘の問いに私は即答しない。桂の木に象徴される私の物語は旧く長く感傷的なものになりそうだった。

「秘密」

「ふーん」

桂の若木から木漏れる光が娘の頬に煌めいて既にそこに新しい物語を描き始めていることに私は気づいたのだった。